

ゴルゴタの丘に立つ三本の十字架。イエス様と一緒に二人の罪人も十字架につけられました。ここには三人の人間の最期の瞬間が描かれています。皆さんはご自分の最期の瞬間をどのように迎えたいですか？「十字架はごめんだ！」と多くの方が思われるのではないかと思います。ここには三人三様の死の迎え方が記されています。死をどう迎えるかと言うのは、様々の人が論じてきた所です。『死の瞬間』という本を著して有名になったキューブラー・ロスという精神科医は、人間は死に至るまでに否認と孤立、取り引き、怒り、抑うつ、受容という5つの典型的なプロセスをたどるといって提唱しました。その後、彼女の説を裏付けるための研究がなされたのですが、人は必ずしもロスの説どおりに5段階を経て死ぬのではないことが分かり、むしろ「人はその人が生きてきたように死ぬ」ということが言われるようになりました。「人は生きてきたように死ぬ。」「死にざまは生きざま。」自分の死を目前にした三人の死にざまは、2000年後の私たちの生きざまを照らし出しているといえるでしょう。つまりこの箇所は、ひとごとではない、私たち自身の生と死を考えさせてくれる箇所であるということです。

第一の人間は、「犯罪人」と言われていますが、多くの学者の認めるところでは、「熱心党」と呼ばれる武装集団に属する、今風に言えば政治的主張を掲げるテロリストであったということです。イエス様も体制批判と思えなくもない言葉を語ってこられましたし、弟子の中にも熱心党員がいましたから、この男がイエスを自分の味方だ、あるいは自分と近い考えを持っているはずだと考えたということは十分にありうることです。またイエスに「世直し」を期待した民衆も、イエスをそのように見ていました。けれどもその勝手な期待を裏切られた人々は、今度は逆にイエスに怒りを向け、ののしる側に回りました。この犯罪人もそのような人間の一人だったのです。ユダヤの為政者たちがイエスに向かって「自分を救ってみろ」とののしり、次いでローマの兵士たちが「自分を救ってみろ」とののしり、そして三度目に「自分を救ってみろ」とののしったのがこの男でした。けれども彼が前の二人と違うのは、さらにもう一言付け加えていることです。「自分自身と我々をすくってみろ。」「救われるべきは、世直しを目指す我々ではないのか。お前も俺たちと同じ

ように貧困をなくし圧政を止めさせるために活動してきたのなら、お前自信も俺たちも助けてみせろ！』単なる嘲りではありません。その背後には、大義への誇りと忠誠心があるのです。もし奇跡が起こるなら、今まで成し遂げようとして成しえなかったこと、その続きをぜひとも完成させたいものだ、という思いがあるのです。この犯罪人、あなどることはできません。彼はある意味、メシアに救いを求めているのです。

第二の犯罪人。彼も熱心党であります。けれども彼の場合は第一の男と違って、ののしることをしません。むしろ第一の男をたしなめています。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」(23:40-41)。彼にあるのは、自分の人生に対する後悔です。テロリストですから、人を傷つけ殺害してきたのでしょう。良心にさいなまれていたのかもしれませんが。そしてこうなったのは、自業自得だと考えています。そしてイエスに求めます。「私を思い出してください。」実は当時の墓石にこの言葉が刻まれているのを考古学者が発見したそうです。最近では墓石に色々な言葉を刻むようになりました。私たちが年に一度永眠者の日に墓参りをしますと、色々なお墓を見ますよね。もし「私を思い出してください」と書かれた墓石を見たら、どんなことを考えますか？ 死んだ人はわたしたちの心の中で生き続けると言いますが、そのようなことを考えますか。詩編には、「主よ…ますしい人を忘れないでください。」(詩 10:12)という祈りがあります。この罪人のイエスに向けられた願いは、生きている人に「忘れないでください」「思い出してください」と訴えているのではなく、イエスをメシア(神に等しい方)と認め、その方に向かって祈る祈りです。最後の審判の時に自分を憐れんでほしいという祈りです。彼には、自分の人生で神の前に誇るべきものが微塵もないことに絶望しています。自らの死に直面して、自分の業によっては自分を義とできないことを思い知ったのです。彼はイエスがメシアであるという一筋の希望にすがっているのです。「わが身の望みはただ主にかかれり」(54年版讃美歌 280番)。彼の心境はまさにこれです。

もう一つ、この男の心の中には、恐れがあります。第一の男をとがめたとき、彼の第一声は「お前は神を恐れ

ないのか。」でした。この断末魔に、やっとの思いで振り絞った言葉、彼が熱心党の同士にもっとも言いたかった言葉は、神への恐れでした。死の恐怖、人生を無駄にした無念、取り返しのつかない所業と裁きへの恐れももちろんです。しかし同時にこの恐れは希望の源でもあるのです。神は、自分たちとは違って何の罪もないイエスという人を、十字架で死なせるということを行なう。こんなひどいことを神はなさる。ここには因果応報、自業自得という原理以外の力がこの世界には働いているという気づきがあるのです。世界に働いているのは、法則ではなく神の意志だ。冷たい法則ではなく、熱い愛の意志だという認識です。彼は、ここに一筋の希望を見ます。もしかしたら、神は非道の限りを尽くしてきた自分でもお救いになるかもしれないという微かな期待です。彼はこの微かな期待の最期の望みをかけて、最後の力を振り絞ってイエスに祈りました。「わたしを思い出してください。」

第一の男と、第二の男、彼らの違いは何だったのでしょうか。第一の男はこれまで生きてきたように、死のうとしています。もし仮に命が長らえたとしたら、今まで歩んできた人生をもう少し延長したいと願うのです。人生の延長線上に救いを見ているのです。イエスを嘲る中で、万が一の救いを求めて、彼が求めたのは、自分が思った通りの救いでした。これに対して第二の男は、自分の思った通りの救いを完全にあきらめてしまっています。思いのままに歩んできた人生を呪わしく思っているのです。彼は悔い改めています。悔い改めの意味は方向転換です。生きてきたようにだけは死にたくないと思っているのです。ヨハネ 12:25 には「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」とあります。彼は自分の生の延長線上に天国はないことを知っているのです。

パウロは、「わたしは、キリストと共に十字架に掛けられています」と言いました（ガラテヤ 2:19）。つまり、今この瞬間に、イエスと共に十字架につけられているあの犯罪人は自分だという思いで日々を過ごしているということです。私たちが今この瞬間に体験していること、私たちの目には見えない現実、それは、『日々私たちは死んでいる』ということなのです（I コリント 15:31、II コリント 4:10-11）。これまでの人生の延長線上に、今があるのではなく、未来があるのでもありません。私たちに求められているのは、自分の過去を憎むほどに忘れ、

その過去の延長上に何かを築き上げようとするのではなく、今この瞬間に、イエスに望みを置くことなのです。もう一度申し上げます。過去があって今があり、今が未来を築いていくではありません。イエスの十字架の贖いがある今が生きることをゆるされ、イエスの再臨と復活の希望から今の私が方向づけられるのです。イエスは私の過去であり未来です。原因結果の因果律、この私たちの頭の中にある考えが現実なのではなく、神の御意志、神の愛の熱情が現実を刻一刻と造り出しているのです。私たちはこのことに安心と希望を置く者です。人間の思考が作り出した因果律ではなく、生きて働いておられる神様の現実がわが身に起こる、そのように変えられることが洗礼の秘密です。

最後に、三番目の人物に目を移してみましょう。それはイエス様です。イエス様は、人を救えないメシアとして描かれています。自分も救えない。熱心党の第一の男も救えない。しかし、この救えないということは、救いとはこうあるべきだという人間の思い込みの中でのことです。第二の男、悔い改めた男にとっては、イエスの言葉は安心と希望になりました。自分の思った通りではない救いがある。まだ見ぬ救いがある。イエスはその救いを差し出されました。「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる。」これまでの人生の延長としてではなく、情性としてではなく、過去を憎むほどに忘れて、幼子のように今この瞬間に全く新しいことが起こっているという認識をもって、一瞬一瞬を生きる道が今、示されています。これまでの経験から考えれば、今日イエス様と一緒に樂園にいるなどということはありません。しかし、私たちに呼びかけられているのは、経験からではなく、因果律の知識からではなく、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」というこの言葉から一瞬一瞬を生きるようにということなのです。「人生一歩先は光」とある牧師が言いました。カトリックのある聖人は、光がまぶしすぎて目がくらんでいるから闇なのだと言いました。過去の経験から、因果律からは見えない光が私たちを待っています。私たちは生きてきたように死ぬではありません。全く新しい命、復活の命が私たちを待っているのです。次の瞬間にそれが起こる、そのイエス様の御言葉を信じて生きるときに、私たちは自分がパラダイスの中にいることを見出すのです。